

総合型選抜 二〇二四年度過去問題

日本語日本文学科 日本語日本文学コース

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

東京帝国法科大学教授長谷川謹造先生は、ヴェランダの籐椅子とういすに腰をかけて、ストリントベルクの『作劇術』ドラマトゥルギイを読んでいた。

先生の専門は、殖民政策しよくみんの研究である。従って読者には、先生がドラマトゥルギイを読んでいるという事が、いささか、唐突の感を与えるかも知れない。が、学者としてのみならず、教育家としても、令名ある先生は、専門の研究に必要でない本でも、それが何らかの意味で、現代の学生の思想なり、感情なりに、関係のある物は、暇のある限り、かならず一応は、眼を通して置く。現に、昨今は、先生の校長を兼ねている、或高等専門学校の生徒が、愛読するという、唯、それだけの理由から、*1オスカア・ワイルドのデ・プロファンディスとか、インテンションズとかいう物さえ、一読の労を執った。そういう先生の事であるから、今読んでいる本が、歐洲近代の戯曲おうしゅう及俳優を論じた物であるにしても、別に不思議がる所はない。何故といえ、先生の薰陶を受けている学生の中には、イブセンとか、ストリントベルクとか、乃至メテリリンクとかの評論を書く学生がいるばかりでなく、進んでは、そういう近代の戯曲家の跡を追って、作劇を一生の仕事にしようとする、熱心家さえいるからである。

先生は、警拔な一章を読み了るごとに、黄いろい布表紙の本を、膝の上へ置いて、ヴェランダに吊してある岐阜提灯ぎふちようちんの方を、漫然と一瞥する。不思議な事に、そうするや否や、先生の思量は、ストリントベルクを離れてしまう。その代り、一しよにその岐阜提灯を買に行った、奥さんの事が、心に浮んで来る。先生は、留学中、米国で結婚をした。だから、奥さんは、勿論、亜米利加人である。が、日本と日本人とを愛する事は、先生と少しも変りがない。殊に、日本の巧緻なる美術工芸品は、少からず奥さんの気に入っている。従って、岐阜提灯をヴェランダにぶら下げたのも、先生の好みというよりは、むしろ、奥さんの日本趣味が、一端を現したものと見て、しかるべきであらう。

先生は、本を下に置く度に、奥さんと岐阜提灯と、そうして、その提灯によって代表される日本の文明とを思った。先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面では、かなり顕著な進歩を示している。が、精神的には、ほとんど、これというほどの進歩も認める事が出来ない。否、むしろ、或意味では、墮落している。では、現代における思想家の急務として、この墮落を救済する途を講ずるのには、どうしたらいいのであろうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論断した。武士道なるものは、決して偏狭なる島国民の道徳をもって、目せらるべきものでない。かえってその中には、欧米各国の基督教的精神と、一致すべきものさえある。

この武士道によって、現代日本の思潮に帰趣を知らしめる事が出来るならば、それは、独り日本の精神的文明に貢献する所があるばかりではない。ひいては、欧米各国民と日本国民との相互の理解

を容易にするという利益がある。あるいは国際間の平和も、これから促進されるという事があるであらう。——先生は、日頃から、この意味において、自ら東西両洋の間に横わる橋梁にならうと思っている。こういう先生にとつて、奥さんと岐阜提灯と、その提灯によつて代表される日本の文明とが、或調和を保つて、意識に上るのは決して不快な事ではない。

ところが、何度かこんな満足を繰返している中に、先生は、追々、読んでいる中でも、思量がストリントベルクとは、縁の遠くなるのに気がついた。そこで、ちよいと、忌々しそうに頭を振つて、それからまた丹念に、眼を細い活字の上に曝しはじめた。すると、丁度、今読みかけた所にこんな事が書いてある。

——俳優が最も普通なる感情に対して、或一つの恰好な表現法を発見し、この方法によつて成功を贏ち得る時、彼は時宜に適すると適せざるとを問わず、一面にはそれが樂であるところから、また一面には、それによつて成功するところから、ややもすればこの手段に赴かんとする。しかしそれが即ち型なのである。……

先生は、由来、芸術——殊に演劇とは、風馬牛の間柄である。日本の芝居でさえ、この年まで何度と数えるほどしか、見た事がない。——かつて或学生の書いた小説の中に、梅幸という名が、出て来た事がある。さすが、博覧強記をもつて自負している先生にも、この名ばかりは何の事だかわからない。そこでついでの際に、その学生を呼んで、訊いて見た。

——君、梅幸というのは何だね。

——梅幸——ですか。梅幸といひますのは、当時、丸の内の帝国劇場の座附俳優で、唯今、*「太閤記」十段目の操を勤めている役者です。

*3 小倉の袴をはいた学生は、慇懃に、こう答えた。——だから、先生はストリントベルクが、簡勁な筆で論評を加えている各種の演出法に対しても、先生自身の意見というものは、全然ない。唯、それが、先生の留学中、西洋で見た芝居の或ものを聯想させる範囲で、幾分か興味を持つ事が出来るだけである。いわば、中学の英語の教師が、イデオムを探すために、バアナアド・シヨウの脚本を読むと、別に大した相違はない。が、興味は、曲りなりにも、興味である。

ヴェランダの天井からは、まだ灯をともしない岐阜提灯が下つている。そうして、籐椅子の上では、長谷川謹造先生が、ストリントベルクのドラマトウルギイを読んでいる。自分は、これだけの事を書きさえすれば、それが、いかに日の長い初夏の午後であるか、読者は容易に想像のつく事だろうと思う。しかし、こういったからといって、決して先生が無聊に苦しんでいるという訳ではない。そう解釈しようとする人があるならば、それは自分の書く心もちを、わざとシニカルに曲解しようとするものである。——現在、ストリントベルクさえ、先生は、途中でやめなければならなかった。何故といへば、突然、訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨げてしまったからである。世間は、いくら日が長くても、先生を忙殺しなければ、やまないらしい。……

先生は、本を置いて、今し方小間使が持つて来た、小さな名刺を一瞥した。象牙紙に、細く西山篤子と書いてある。どうも、今までに逢つた事のある人では、ないらしい。交際の広い先生は、籐椅子を離れながら、それでも念のために、一通り、頭の中の人名簿を繰つて見た。が、やはり、それらしい顔も、記憶に浮んで来ない。そこで、葉代りに、名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置くと、先生は、落着かない容子で、*4 銘仙の単衣の前を直しながら、ちよいとまた、鼻の先の岐阜提灯へ眼をやつた。誰もそうであろうが、待たせてある客より、待たせて置く主人の方が、こういう場合は多く待遠しい。もつとも、日頃から謹厳な先生の事だから、これが、今日の

よくな未知の女客に対してでなくとも、そうだとする事は、わざわざ断る必要もないであろう。

やがて、時刻をはかつて、先生は、応接室の扉をあけた。中へはいつて、おさえていたノブを離すのと、椅子にかけていた四十恰好の婦人の立上ったのが、ほとんど、同時である。客は、先生の判別を超越した、上品な鉄御納戸の単衣を着て、それを黒の絹の羽織が、胸だけ細く刺した所に、帯止めの翡翠を、涼しい菱の形にうき上らせている。髪が、丸髷に結つてある事は、こういう些事に無頓着な先生にも、すぐわかった。日本人に特有な、丸顔の、琥珀色の皮膚をした、賢母らしい婦人である。先生は、一瞥して、この客の顔を、どこかで見た事があるように思った。

——私が長谷川です。

先生は、愛想よく、会釈した。こういうえば、逢つた事があるのなら、向うでいい出すだろうと思つたからである。

——私は、西山憲一郎の母でございます。

婦人は、はつきりした声で、こう名乗つて、それから、叮嚀に、会釈を返した。

西山憲一郎といえ、先生も覚えてる。やはりイブセンやストリントベルクの評論を書く生徒の一人で、専門は確か*6。独法だつたかと思うが、大学へはいつてからも、よく思想問題を提げては、先生の許に出入した。それが、この春、腹膜炎に罹つて、大病院へ入院したので、先生もついでながら、一、二度見舞いに行つてやつた事がある。この婦人の顔を、どこかで見た事があつたように思つたのも、偶然ではない。あの眉の濃い、元氣のいい青年と、この婦人とは、日本の俗諺が、瓜二つと形容するように、驚くほど、よく似ているのである。

——はあ、西山君の……そうですか。

先生は、ひとりで頷きながら、小さなテーブルの向うにある椅子を指した。

——どうか、あれへ。

婦人は、一応、突然の訪問を謝してから、又、叮嚀に礼をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出したのは、手巾であろう。先生は、それを見ると、早速テーブル上の朝鮮団扇をすすめながら、その向う側の椅子に、座をしめた。

——結構なおすまいでございます。

婦人は、やや、わざとらしく、室の中を見廻した。

——いや、広いばかりで、一向かまいません。

こういう挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて来た冷茶を、客の前に直させながら、直に話頭を相手の方へ転換した。

——西山君はいかがです。別段御容態に変わりはありませんか。

——はい。

婦人は、つましく両手を膝の上に重ねながら、ちよいと語を切つて、それから、静にこういつた。やはり、落着いた、滑な調子でいつたのである。

——実は、今日も侘の事で上つたのでございますが、あれもとうとう、いけませんでございまして。在生中は、いろいろ先生に御厄介になりました……

婦人が手にとらないのを遠慮だと解釈した先生は、この時丁度、紅茶茶碗を口へ持つて行こうとしていた。なまじいに、くどく、すすめるよりは、自分で啜つて見せる方がいいと思つたからである。ところが、まだ茶碗が、柔な口髭にとどかない中に、婦人の語は、突然、先生の耳をおび

やかした。茶を飲んだものだろうか、飲まないものだろうか。——こういう思案が、青年の死とは、全く独立して、一瞬の間、先生の心を煩わした。が、いつまでも、持ち上げた茶碗を、片づけずに置く訳には行かない。そこで先生は思切つて、がぶりと半碗はんわんの茶を飲むと、心もち眉まゆをひそめながら、むせるような声で、「そりゃあ」といった。

——……病院におりました間も、よくあれが御噂おんわさなど致したものでございますから、御忙おいそがしからうとは存じましたが、お知らせかたがた、お礼を申上げようと思ひまして……

——いや、どうしまして。

先生は、茶碗を下へ置いて、その代りに青い蟬せみを引いた団扇をとりあげながら、慥然ぶぜんとして、こういった。

——とうとう、いけませんでしたかなあ。丁度、これからという年だったので……私はまた、病院の方へも御無沙汰ごぶさたしていたものですから、もう大抵、よくなされた事だとばかり、思つていました——すると、何時いつになりますかな、なくなられたのは。

——昨日きのうが、丁度初七日でございます。

——やはり病院の方で……

——さようでございます。

——いや、実際、意外でした。

——何しろ、手のつくせるだけは、つくした上なのでございますから、あきらめるより外は、ございせんが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて、愚痴ぐちが出ていけませんものでございます。

こんな対話を交換している間に、先生は、意外な事実気がついた。それは、この婦人の態度なり、挙措きよそなりが、少しも自分の息子の死を、語っているらしくないという事である。眼めには、涙もたまつていない。声も、平生の通りである。その上、口角には、微笑さえ浮んでいる。これで、話を聞かずに、外貌がいぼうだけ見ているとしたら、誰でも、この婦人は、家常茶飯事かじょうさはんじを語っているとか、思わなかつたのに相違ない。——先生には、これが不思議であつた。

——昔、先生が、柏林ベルリンに留学していた時分の事である。今のカイゼルのおとうさんに当る、ウィルヘルム第一世が、崩御ほうぎょされた。先生は、この訃音ふいんを行きつけの珈琲店コーヒーで耳にしたが、元より一通りの感銘しかうけようはない。そこで、何時いつものように、元氣のいい顔をして、杖つえを脇わきにはさみながら、下宿へ帰つて来ると、下宿の小供が二人、扉をあけるや否や、両方から先生の頸くびに抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は、茶色のジャケットを着た、十二になる女の子で、一人は、紺の短いズボンをはいた、九つになる男の子である。子煩悩こぼんのうな先生は、訳がわからないので、二人の明あかるい色をした髪の毛を撫なでながら、しきりに「どうした。どうした。」と喋り慰めた。が、小供は、なかなか泣きやまない。そうして、涙なみだをすすり上げながら、こんな事をいう。

——おじいさまの陛下が、おなくなりなすつたのですって。

先生は、一国の元首の死が、小供にまで、これほど悲かなしまれるのを、不思議に思った。独り皇室と人民との関係というような問題を、考えさせられたばかりではない。西洋へ来て以来、何度も先生の視聴を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のように、日本人たり、武士道の信者たる先生を、驚かしたのである。その時の怪訝かいがと同情とを一つにしたような心もちは、いまに忘れようとしても、忘れる事が出来ない。——先生は、今も丁度、その位な程度で、逆に、この婦人の泣かないのを、不思議に思っているのである。

が、第一の発見の後には、間もなく、第二の発見が次いで起った。――

丁度、主客の話題が、なくなった青年の追懐から、その日常生活のデイトイルに及んで、更にまた、もとの追懐へ戻ろうとしていた時である。何かの拍子で、朝鮮 団扇が、先生の手をすべって、ぱたりと寄木の床の上に落ちた。会話は無論寸刻の断続を許さないほど、切迫している訳ではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて、床の方へ手をのばした。団扇は、小さなテエブルの下に――上靴にかくれた婦人の白足袋の側に落ちてゐる。

その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持った手が、のつてゐる。勿論これだけでは、発見でも何でもない。が、同時に、先生は、婦人の手が、はげしく、ふるえているのに気がついた。ふるえながら、それが感情の激動を強いて抑えようとするせいか、膝の上の手巾を、両手で裂かないばかりに緊く、握っているのに気がついた。そうして、最後に、黻くちやになった絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にでもふかれているように、繡のある縁を動かしているのに気がついた。――婦人は、顔でこそ笑っていたが、実はさつきから、全身で泣いていたのである。

団扇を拾つて、顔をあげた時に、先生の顔には、今までにない表情があつた。見てはならないものを見たという敬虔な心もちと、そういう心もちの意識から来る或満足とが、多少の芝居気で、誇張されたような、はなはだ、複雑な表情である。

――いや、御心痛は、私のような小供のない者にも、よくわかります。

先生は、眩しいものでも見るように、やや、大仰に、頸を反らせながら、低い、感情の籠った声でこういった。

――ありがとうございます。が、今更、何と申しましても、かえらない事でございますから……
婦人は、心もち頭を下げた。晴々した顔には、依然として、ゆたかな微笑が、たたえている。――

* * *

それから、二時間の後である。先生は、湯にはいつて、晩飯をすませて、食後の桜実をつまんで、それからまた、楽々と、ヴェランダの籐椅子に腰を下した。

長い夏の夕暮は、何時までも薄明りをただよわせて、硝子戸をあけはなした広いヴェランダは、まだ容易に、暮れそうないもない。先生は、そのかすかな光の中で、さつきから、左の膝を右の膝の上へのせて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり 岐阜提灯の赤い房を眺めている。例のストリントベルクも、手にはとって見たものの、まだ一頁も読まないらしい。それも、そのはずである。――先生の頭の中は、西山篤子夫人のけなげな振舞で、いまだに一ぱいになっていた。

先生は、飯を食いながら、奥さんに、その一部始終を、話して聞かせた。そうして、それを、日本女の武士道だと賞賛した。日本と日本人とを愛する奥さんが、この話を聞いて、同情しないはずはない。先生は、奥さんに熱心な聴き手を見出した事を、満足に思った。奥さんと、さつきの婦人と、それから岐阜提灯と――今では、この三つが、或倫理的な背景を持って、先生の意識に浮んで来る。

先生はどの位、長い間、こういう幸福な回想に耽っていたか、わからない。が、その中に、ふと或雑誌から、寄稿を依頼されていた事に気がついた。その雑誌では「現代の青年に与うる書」とい

う題で、四方の大家に、一般道徳上の意見を徴していたのである。今日の事件を材料にして、早速、所感を書いて送る事にしよう。——こう思つて、先生は、ちよいと頭を搔いた。

搔いた手は、本を持っていた手である。先生は、今まで閑却されていた本に、気がついて、さつき入れて置いた名刺を印に、読みかけた頁を、開いて見た。丁度、その時、小間使が来て、頭の上の岐阜提灯をともしたので、細い活字も、さほど読むのに煩わしくない。先生は、別に読む気もなく、漫然と眼を頁の上に落した。ストリントベルクはいう。——

——私の若い時分、人はハイベルク夫人の、多分巴里から出たものらしい、手巾のことを話した。それは、顔は微笑しながら、手は手巾を二つに裂くという、二重の演技であった。それを我らは今、臭味と名づける。……

先生は、本を膝の上に置いた。開いたまま置いたので、西山篤子という名刺が、まだ頁のまん中にのつている。が、先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない。そうかといつて、奥さんでもなければ日本の文明でもない。それらの平穩な調和を破ろうとする、得体の知れない何物かである。ストリントベルクの指弾した演出法と、実践道徳上の問題とは、勿論ちがう。が、今、読んだ所からうけとつた暗示の中には、先生の、湯上りののんびりした心もちを、擾そうとする何物かがある。武士道と、そうしてその型と——

先生は、不快そうに二、三度頭を振つて、それからまた上眼を使いながら、じつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。……

(出典 芥川龍之介「手巾」 一部表記を改めた箇所がある。)

- *1 オスカア・ワイルド イギリスの詩人・作家・劇作家。以下は欧州の劇作家。
- *2 「太閤記」 豊臣秀吉の一代記の総称。
- *3 小倉の袴 「小倉」は福岡県小倉地方でつくられた木綿織で、厚く織られている。「小倉の袴」は、多く学生が着用した。
- *4 銘仙の単衣 「銘仙」は絹織物の一種。「単衣」は裏地のついていない着物。
- *5 鉄御納戸 「鉄御納戸」は染色の名で、緑がかった鉄色。
- *6 独法 ドイツの法律。

問一 「岐阜提灯」は先生にとってどのようなものか。読み取れることを二〇〇字以内で述べなさい (字数には句読点を含む)。

問二 傍線部について、先生のどのような気持ちから生じたものか、二〇〇字以内で自分の意見を自由に述べなさい (字数には句読点を含む)。

問三 この作品を通じて作者は何を表現しようとしたと思うか。四〇〇字以内で自分の意見を自由に述べなさい (字数には句読点を含む)。